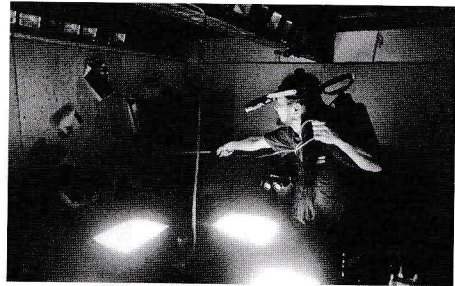


stage

▼写真下：山内雅一。1月25～27日 東京赤坂・国際交流基金フォーラムにて行われたモレキュラーシアター「直下型演劇」。



「直会」や、えんぶり

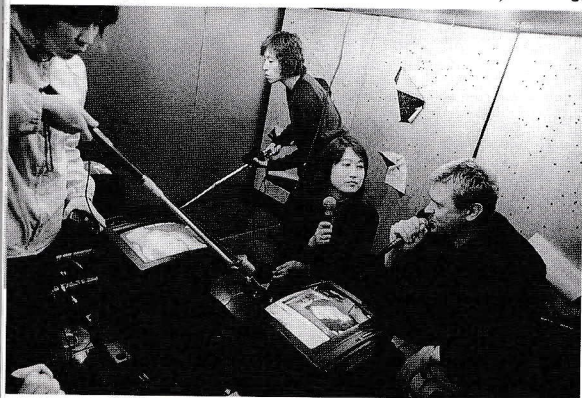
であるということもまた9・11以降感じる。

しかし、文化は食の前には無力であるというところから、多重的の意味をもつTWIN。その意味の多重性が私の思考を走らせる。

東西文化の対立やテクノロジーで経済主体だった20世紀から、南北文化の対立、その先は少数民族から地方文化、そして家族や個人の文化のなんたるかを考える21世紀への移行を象徴する9・11。

多重的の意味をもつTWIN。その意味の多重性が私の思考を走らせる。多重的の意味をもつTWIN。その意味の多重性が私の思考を走らせる。

今回のモレキュラーシアターの赤坂ツインタワーでの直下型演劇。イランの映画監督であるマフマルバフの「アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない、恥辱のあまり崩れ落ちたのだ」の言葉が響き渡る。あの9・11以降も色あせない二階建て構造に加え、不釣り合いな二部構成。それでいて妙なバランス（不均衡という釣り合いを保つ均衡の意の造語）と9・11以前から使っていた場所という衝撃。あまりにはまりすぎていて怖いくらいだった。



▲写真右から：ミロスワフ・パウカ、三浦文恵、大久保一恵、長尾広海 撮影：吉田亨（2枚とも）

の豊作を祈る古人の切実な願いなどを思うと、昔は確かに食が文化になっていたというところは間違いない事実である。現代日本においての食は嗜好の意味が強く、古代のような願いを人の心に見出すことは不可能だ。持つ者が持たざる者を考えることはどこかに余裕があるからできるのであり、無視すれば9・11が起り、考えれば持つ者はいやらしく、持たざる者も甘えがでる。そして甘えが当たり前となる。確かに今、私たちが持つていないのは私たちが築き上げたものではないと言ったことも事実だ。私は裕福には育たなかったが、アフガン人に比べれば持つ者ということになるのだろうか。ただ私は望むと望まざるに関わらず、アフガン人がそうであるように、この生まれを変えることはできない。そしてそこに立脚した物の考え方しかできない。誰もそうだが、全く違う生まれでもお互いに理解しようという努力は人間が社会的動物である限り必要だ。コミュニケーションを図ることが人間を人間らしくするものだと思う。しかし、持たざる者の言葉は悲しいかな持つ者の言葉より大きくならない。どうしても同じにすらならない。人間が動物である以上、持つ者の論理が弱肉強食の原理のもと横行していくのか。ユートピアと信じられた社会主義が人間の欲望の前に脆くも崩れさった今、安易に平等を唱えることは強者の奢りではないかとも思う。対等になるうとして出来ない人間。そこに人間の悲哀と卑小さが現われているとも思える。そこを持つ者が感じる。その微妙なバランスの上に自分が生かされているということを持つ者が感じなければならぬ。持つ者の責任であるはずだ。持たざる者はそれを考える余裕がない。古代ギリシャの「哲学」という言葉が「暇」という語から発生したように、暇のない者は考えることができない。次の食をどうするか考えなくても次の食が存在する者の食間は暇そのものだ。本当に持たざる者の食間は無いに等しいはずだ。食の最中にすら次の食のことを考えることだろう。つまり食のことしか考えられないのだ。時間的には実在しても、精神的に不在なのである。マフマルバフが言うように、仏像はタリバーンが破壊したのではなく、まさにそれを恥じて崩れ

に理解しようという努力は人間が社会的動物である限り必要だ。コミュニケーションを図ることが人間を人間らしくするものだと思う。しかし、持たざる者の言葉は悲しいかな持つ者の言葉より大きくならない。どうしても同じにすらならない。人間が動物である以上、持つ者の論理が弱肉強食の原理のもと横行していくのか。ユートピアと信じられた社会主義が人間の欲望の前に脆くも崩れさった今、安易に平等を唱えることは強者の奢りではないかとも思う。対等になるうとして出来ない人間。そこに人間の悲哀と卑小さが現われているとも思える。そこを持つ者が感じる。その微妙なバランスの上に自分が生かされているということを持つ者が感じなければならぬ。持つ者の責任であるはずだ。持たざる者はそれを考える余裕がない。古代ギリシャの「哲学」という言葉が「暇」という語から発生したように、暇のない者は考えることができない。次の食をどうするか考えなくても次の食が存在する者の食間は暇そのものだ。本当に持たざる者の食間は無いに等しいはずだ。食の最中にすら次の食のことを考えることだろう。つまり食のことしか考えられないのだ。時間的には実在しても、精神的に不在なのである。マフマルバフが言うように、仏像はタリバーンが破壊したのではなく、まさにそれを恥じて崩れ

多重の意味が走らせる思考

演劇空間スペースベン

私の卑小な芸術活動では今は考えても、結びつけられそうにもない。自分が情けない。私の芸術論も所詮、持つ者の暇の上に成り立っているのだらう。自分の芸術論がしっかりとした生の基盤の上に成り立っていないことを痛感する。

赤坂ツインタワーの直下型演劇はそんな考えを走らせる衝撃的きっかけであった。

我々には何が出来るのか。持たざる者が甘えを覚えるのではなく、人間の尊厳を取り戻すために何をすべきか。その先に人間の未来があるのではないか。持つ者皆が考えなければならぬ問題なのだと思う。

持つ者が持つ者の食間を豊かなものに変えても、持たざる者の食間は変わらないかもしれない。逆に悪くなるかもしれないという危惧はある。ただ、持つ者は物質的に豊かにはなっていない。精神的にはとても貧しいということ。はつきりいえる。この精神的貧しさが社会を空虚なものにしているという思いもある。この持てる貧しさを豊かにしたい。これが巡り巡って持たざる貧しき者を救うと信じて作品を発表する。やはり私も次の作品（自他に関わらず）を求める精神的持たざる者の一人にすぎない。

〈文／船水流〉

4月のFriday Amusement Negative Shop

■4月5日（第426回）
安達良春プラスワンシアター
タイトル未定
■4月12日（第427回） 未定
■4月19日（第428回） 未定
■4月26日（第429回） 未定

※全て午後7時30分～、料金500円
チケットはスペースベンにて販売

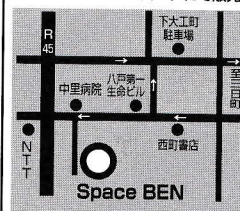


図 スペースベン 八戸市柏崎1-11-8 ☎FAX 43-9876

FANSでは、脚本を広く募集しています。何か表現したくても露み出せないあなた、一度「物語」を書いてみませんか？ FANSでは、そんな方の思いを大切に舞台にのせてみたいと思っております。

スペースベンHPアドレス <http://spaceben.com/>
Eメールアドレス fans@spaceben.com